九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

階層的な集団間関係において上位集団の顕現性が集団間バイアスに及ぼす影響

縄田, 健悟
九州大学大学院人間環境学府

山口, 裕幸
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/15711

出版情報：九州大学心理学研究. 9, pp.27-33, 2008-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Kyushu University Psychological Research
2008, Vol.9, 27-33

階層的な集団間関係において上位集団の顕現性が集団間バイアスに及ぼす影響[1)]

縄田　健悟　九州大学大学院人間環境学府
山口　裕幸　九州大学大学院人間環境学研究院

The effect of Superordinate group salience on intergroup bias in hierarchical intergroup relations

Kengo Nawata (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Hiroyuki Yamaguchi (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The primary purpose of the present study is to test the following hypotheses: (1) superordinate group salience will reduce intergroup bias; and (2) the relationship between original group salience and intergroup bias will be absent when superordinate group salience is high. Hypotheses were tested with 2 (superordinate group salience: high vs. low) × 2 (original group salience: high vs. low) between subjects design. Results did not reveal a significant main effect between superordinate group salience and intergroup bias. Furthermore, superordinate group salience did not display a significant moderating effect on the relationship between original group salience and intergroup bias. It is concluded that a mere emphasis on superordinate group itself is not enough to reduce intergroup bias.

Keywords: intergroup bias, Common Ingroup Identity Model, superordinate group, category salience, hierarchical intergroup relationship

問　題

本研究の目的は，階層的な集団間関係において，集団の顕現性が集団間バイアスに与える影響を検討することである。本研究では特に，共通内集団アイデンティティモデルに基づき，上位集団の顕現性が集団間バイアスを低減させる効果に関して検討を行う。

集団間バイアス

集団間行動に関する研究は，自分が所属していない集団（外集団）よりも自分が所属している集団（内集団）を好ましく評価することを明らかにしている（Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971）。これは集団間バイアス（intergroup bias）と呼ばれる。この現象が生じる理由として有力な説明を提出している理論の一つに社会的アイデンティティ理論がある（Tajfel & Turner, 1979；Hogg & Abrams, 1988）。社会的アイデンティティ理論によると，内集団と自己とを同一視することによって，自己と同様に内集団を高く価値付けるような動機づけが生じるために，外集団よりも内集団をより高く，好ましく評価するという。集団間バイアスは，人種差別・民族紛争などの社会問題の原因となる認知的なバイアスであるため，集団間バイアスを低減するために必要な条件を見つけ出すことは社会心理学の重要課題であるといえる。

集団間関係の階層性

従来の集団間関係を対象とした研究では，一組の集団カテゴリーや全く独立である複数の集団カテゴリーが想定されてきた。しかし，現実の集団は階層をなすことが多い。例えば，日本の下位カテゴリーの一つとして東京都が存在し，さらに東京都の下位カテゴリーとして千代田区が存在する。もしくは，ある会社の中でも営業部，人事部，経理部といったように内部が分かれており，さらに営業部の中も関東営業課，関西営業課といったように細分化されていることがある。このように，現実の集団は階層的な「入れ子構造」になっていることが多い。そのため，たとえ，外集団の成員であっても，より上位の階層で捉えるならば，上位集団における内集団成員として捉えることができる。逆に，内集団の成員であっても，より細分化したカテゴリーで捉えるならば外集団の成員として捉えることも可能である。このように，階層的な集団構造を考えると，内集団・外集団という分け方はある一つの階層を取り出して見たときの見方でしかなく，固定的なものではない。したがって，集団間関係の研究は，集団間関係の階層性を考慮に入れた上で行われる必要があると考えられる。

本研究では従来看過されてきた階層的な集団間関係に

[1)] 本論文は九州大学教育学部に提出した卒業論文を再分析及び加筆修正したものである。また，本論文の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会にて発表された。

おける集団間バイアスの検討を行う。そのために，階層的な集団間関係の最も単純な形として，一組の内集団・外集団が存在し，両者を包括的に含む共通の上位集団が存在する状態を考える。具体的に本研究の実験計画で扱った集団は，文系学部・理系学部が存在し，その両者の共通の上位集団としてA大学がある状態である。なお，以下 Gaertner & Dovidio (2000) に倣い，集団間バイアスを測定する次元としての一組の内集団・外集団（文系学部・理系学部）を「原集団」，二つの原集団を包含する共通の上位集団（A大学）を「上位集団」と呼ぶ。

集団顕現性

集団の顕現性とは集団カテゴリーが目立つ程度のことを指す。Tajfel & Wilkes (1963) は様々な長さの線分を用いた知覚実験によって，カテゴリーに分類することは，カテゴリー間の違いを強調し，カテゴリー内の類似性を高めることを示した。これは社会的な集団カテゴリーにおいても同様にあてはまり，集団カテゴリーの顕現性が高まることによって，集団間の差異が強く認知され，集団内の類似性が高く認知されることが示されている (Doise, Deschamps, & Meyer, 1978；Hensley & Duval, 1976；Maddox & Gray, 2004)。

この集団の顕現性は集団間バイアスと重要な関係が認められる。社会的アイデンティティ理論に基づくと，集団の顕現性が高まると，自らの所属している集団に対する集団アイデンティティを高めるために，内集団をより高く評価したいという動機付けが高まる。その結果，集団間バイアスが高くなることが予測される (Tajfel, 1982)。Abrams (1985) は，単なる意志決定に関する実験であると教示された場合よりも，二つの集団が存在するときの行動に関する実験であると教示された場合の方が，集団間バイアスが高くなることを示した。この理由として，二つの集団が存在すると教示することが，集団カテゴリーの顕現性を高めたためだと考えられる。このように，本研究においても同様に，原集団の顕現性が高まると集団間バイアスが強くなることが予測される。

仮説1．原集団間の顕現性が高まると，集団間バイアスが高くなるだろう。

上位集団の顕現化による集団間バイアスの低減

本研究では集団間バイアスを低減する方略として共通内集団アイデンティティモデル (Common Ingroup Identity Model；Gaertner et al., 2000) の示唆に着目する。共通内集団アイデンティティモデルによると，内集団と外集団という二つの集団が存在するという認知から，両者を同時に包含する共通の上位集団へと認知を変容することで集団間バイアスが低減できるという。これは，共通の上位集団を持つことで，それまで外集団だった集団が「上位集団次元における内集団」へと認知が変化するためだと説明される。

共通内集団アイデンティティモデルに基づく既存の実験では，実験室場面において二つの集団から一つの集団へと統合することで，原集団間の集団間バイアスがどのように変容するか検討しているものがほとんどであった (Gaertner, Mann, Murrell, & Dovidio, 1989；Gaertner, Dovidio, & Bachman, 1996)。しかしながら，この実験方法では，接触それ自体の効果と共通上位集団の効果とが交絡してしまっているという問題点がある。集団間の接触は集団間バイアスを低減するためにたいへん有用な要因であることが指摘されており (Pettigrew, 1998)，上位集団それ自体の効果を見るためには，接触の効果と上位集団の効果とを分離して検討することが必要となるといえよう。共通内集団アイデンティティモデルの理論的説明によると，共通の上位集団を持つことが集団間のバイアスを低減するのであり，必ずしも集団間での接触は必要ではないといえる。

また，従来の研究の実験では，それまでは存在しなかった新たな一つの上位集団を作り出すことで集団間バイアスの低減の効果を検討している。しかしながら，既に述べたように現実の集団は階層的なものであることが多く，内集団・外集団という関係も，より上位次元で見ると共通の上位集団を持っていることが多い。したがって，共通内集団アイデンティティモデルに基づくと，既に存在している上位集団の存在を目立たせること，すなわち上位集団の顕現化のみで集団間バイアスが低減できると考えられる。本実験では，接触を行わず，さらに上位集団の顕現化のみで集団間バイアスが低減できるか否か，実験的に検討を行う。

仮説2．上位集団の顕現性が高まると，原集団間のバイアスは低くなるだろう。

調整変数としての上位集団顕現性の影響

以上の仮説を踏まえると，原集団の顕現性は集団間バイアスを高め，上位集団の顕現性は集団間のバイアスを低くする効果があると考えられる。では，原集団と上位集団の顕現性の間の関係はいかなるものと考えられるだろうか。

仮説1で示したように，原集団の顕現性が高いときには集団間バイアスが高くなると予測される。これは原集団の顕現性が高まることで集団アイデンティティが高まるためである。その一方で，仮説2で示したとおり，上位集団の顕現性が高いときには，内集団の成員も外集団の成員もともに同じ共通の上位集団の成員であると捉えられる。したがって，上位集団の顕現性が高いときには，外集団の成員であっても「同じ共通の上位集団」の成員であると捉えられるために，原集団顕現性が高まったと

しても外集団としての意識が強くならず，その結果集団間バイアスは高くならないと考えられる。

またこのことは，上位集団の顕現性が，原集団の顕現性と集団間バイアスの高さの関係に関して，調整変数として機能することを意味している。上位集団の顕現性が低いときには，原集団の顕現性と集団間バイアスの高さには強い正の関係が見られるが，上位集団の顕現性が高いときには，原集団の顕現性と集団間バイアスの高さの間には弱い関係しかみられないと考えられる。

このことと関連する研究として，共通内集団アイデンティティモデルに基づく集団間バイアス低減方略である二元アイデンティティ化（Dual Identity）では，原集団の顕現性を低くすることなく，原集団と上位集団を同時に顕現化することで，集団間バイアスが低減されることが示唆されている（González & Brown, 2003, 2006）。これもまた上位集団が顕現化されているときには，原集団の顕現性が高くとも集団間バイアスが生じないという一例である。

以上より，上位集団の顕現性が高いときには，原集団の顕現性が高まることによる集団間バイアスが高まるという効果はみられないと予測できる。このことによって以下の仮説が導出される。

仮説３．上位集団顕現性の効果と原集団顕現性の効果には交互作用が見られ，上位集団顕現性が低いとき，原集団の顕現性と集団間バイアスには正の関連が見られるが，上位集団顕現性が高い時には，原集団の顕現性と集団間バイアスには関連が見られないだろう。

方　法

刺激の選定

大学生・大学院生10名に対し，23枚の山の写真を提示し，写真の好ましさを評定してもらった。評定の結果から同様の平均点で分散が小さい写真を任意に８枚選び出した。８枚の写真の評定に有意な差は無かった（$F_{(7,63)}=.19$, $p=.98$, *n.s.*）。

実験デザイン

上位集団顕現性（高条件・低条件）×原集団顕現性（高条件・低条件）の２要因被験者間計画で実施された。本実験では，上位集団として「A 大学」を用い，原集団として「文系学部・理系学部」を用いた。

実験参加者

A 大学の大学生70名である（男性17名，女性53名；文系学部生58名，理系学部生12名）

実験手続き

文系学部生どうし，及び理系学部生どうしで既知の2, 3人からなる集団で実験は行われた。まず，大学の専攻と印象形成の関連を調べる研究であるというカバーストーリーを伝えた。次に，集団顕現性の操作のための話し合いをしてもらった。そして，集団間のバイアスを測定するために「文系学部」「理系学部」という所属集団名を付された写真の撮影者の好ましさを個人で評定をしてもらった。最後にデブリーフィングを行った。

集団顕現性の操作

集団顕現性の操作は話し合いと共通シンボルの強調によって行われた。

話し合いによる操作は，集団に関する話し合いを行ってもらうことで集団カテゴリーを意識させることを目的としている。上位集団顕現性高条件では，「A 大学生だと実感すること」に関して，５分間集団で話し合いをしてもらった。上位集団顕現性低条件では「A 大学生だと実感すること」に関する話し合いを行わなかった。同様に，原集団高条件では，「文系学部生（理系学部生）だと実感すること」に関して，５分間集団で話し合いをしてもらった。原集団顕現性低条件では「文系学部生（理系学部生）だと実感すること」に関する話し合いを行わなかった。したがって，上位集団顕現性高条件かつ原集団顕現性高条件では，「A 大学生だと実感すること」と「文系学部生（理系学部生）だと実感すること」に関する話し合いを行った。上位集団顕現性高条件かつ原集団顕現性低条件では「A 大学生だと実感すること」の話し合いを行った。上位集団顕現性低条件かつ原集団顕現性高条件では「文系学部生（理系学部生）だと実感すること」の話し合いを行った。上位集団顕現性低条件かつ原集団顕現性低条件では，話し合いを行わなかった。

また，共通シンボルによる顕現性の操作も同時に行った。集団での共通シンボルを提示することで，集団カテゴリーの顕現性を高めた。上位集団顕現性高条件では，実験を行っている間，A 大学の校章と大学名の付された名札を着用してもらった。上位集団顕現性低条件では，大学の校章と名札は着用しなかった。原集団顕現性高条件では，文系及び理系学部どうしで共通の腕章を着用してもらった。原集団顕現性低条件では腕章を着用しなかった。したがって，上位集団顕現性高条件かつ原集団顕現性高条件では，大学の校章と名札を着用するとともに，文系学部及び理系学部であることを示す腕章を着用してもらった。上位集団顕現性高条件かつ原集団顕現性低条件では，大学の校章と名札のみを着用してもらった。上位集団顕現性低条件かつ原集団顕現性高条件では，文系学部及び理系学部であることを示す腕章のみを着用してもらった。上位集団顕現性低条件かつ原集団顕現性低条

件では何も着用しなかった。

従属変数の測定

集団間バイアスを測定する項目として，撮影者の所属集団として「文系学部」及び「理系学部」と下に記された4×2枚の風景写真に対し，その風景写真の撮影者の好ましさを「1.全く好感が持てない」から「7.とても好感が持てる」の7段階評定を行ってもらった。写真はランダムに提示された。なお，上位集団顕現性高条件では，「文系学部」及び「理系学部」の前に「A大学」と付され，上位集団顕現性を高める操作が加えられている。分析においては，内集団に対する好ましさの合計点と外集団に対する好ましさの合計点の差を集団間バイアスの指標とした。集団間バイアスが正に大きいほど強い集団間バイアスを示している。さらに内集団に対する好ましさ，外集団に対する好ましさに関してもそれぞれ分析を行った。

また，操作チェックのために，上位集団，原集団それぞれに対して，Doosje, Ellemers, & Spears (1995) を参考に作成した集団アイデンティティの測定のための4項目に7段階評定で回答してもらった。質問項目は「私は自分を文系学部生として見なしている」などである。信頼性係数はそれぞれ α =.65, α =.76, であった。

結　果

操作チェック

操作チェックのために上位集団顕現性，原集団顕現性を独立変数とし，上位集団アイデンティティを従属変数とする2要因分散分析を行った。その結果，上位集団顕現性高条件において，低条件よりも有意に高い上位集団アイデンティティが示された（$F_{(1,66)}$=4.50, p<.05)。原集団顕現性の主効果と上位集団顕現性×原集団顕現性の交互作用は有意ではなかった（それぞれ $F_{(1,66)}$=.01, *n.s.*；$F_{(1,66)}$=.48, *n.s.*)。同様に，原集団アイデンティティを従属変数とする2要因分散分析を行ったところ，原集団顕現性高条件において，低条件よりも有意に高い原集団アイデンティティが示された（$F_{(1,66)}$=13.42, p<.001)。上位集団の顕現性の主効果と上位集団顕現性×原集団顕現性の交互作用は有意ではなかった（それぞれ $F_{(1,66)}$=.22, *n.s.*；$F_{(1,66)}$=.08, *n.s.*)。以上より，本実験の操作は有効であったといえる。

仮説の検討

条件ごとの内集団に対する好ましさ，外集団に対する好ましさ，集団間バイアスに関しての平均点，標準偏差をTable 1に示した。

上位集団顕現性，原集団顕現性を独立変数とし，集団間バイアスを従属変数とする2要因分散分析を行った。その結果，原集団顕現性のみで有意な主効果が見られ（$F_{(1,66)}$=8.34, p<.01)，原集団の顕現性が低いときよりも高いときに集団間バイアスが高かった。しかしながら，上位集団の顕現性の主効果と交互作用は有意でなかった（上位集団顕現性：$F_{(1,66)}$=.90, *n.s.*；交互作用：$F_{(1,66)}$=.12, *n.s.*)。つまり，上位集団の顕現性が集団間バイアスを低くする効果は見られず，さらに上位集団の顕現性は原集団顕現性と集団間バイアスの関係にも影響を及ぼさなかったといえる。以上より，仮説1は支持されたものの，仮説2，仮説3は支持されなかったといえる。

また，原集団顕現性の及ぼす効果に関してより詳細に分析するために，上位集団顕現性，原集団顕現性を独立変数とし，外集団に対する好ましさを従属変数とする2要因分散分析を行った。その結果，原集団顕現性の主効果が有意であり（$F_{(1,66)}$=8.88, p<.01)，原集団顕現性が低いときよりも高いときに，外集団に対する好ましさが低いという効果が見られた。それに対し，同様に内集団に対する好ましさを従属変数とする2要因分散分析を行ったところ，有意な効果は見られなかった。したがって，原集団顕現性が高まることで生じた集団間バイアスは内集団に対する好ましさが高まることによって生じたものではなく，外集団に対する好ましさが低下することによって生じていたといえる。

Table 1
条件ごとの平均値と標準偏差

	原集団顕現性			
	高条件		低条件	
	上位集団顕現性			
	高条件	低条件	高条件	低条件
内集団に対する好ましさ	18.59 (1.58)	18.25 (3.04)	17.58 (3.32)	19.36 (2.87)
外集団に対する好ましさ	17.12 (3.77)	16.30 (3.69)	18.68 (2.98)	19.43 (2.10)
集団間バイアス	1.47 (3.11)	1.95 (4.39)	−1.11 (2.18)	−0.07 (2.34)

集団間バイアスの発生

原集団顕現性によって，集団間バイアスの高さに有意な差が見られたため，原集団顕現性の高条件と低条件それぞれにおいて，集団間バイアスの発生の検討を行った。その結果，原集団顕現性低条件においては有意な集団間バイアスが見られず（$t_{(36)}=1.69$, *n.s.*），原集団顕現性高条件においてのみ有意な集団間バイアスが見られた（$t_{(36)}=2.66$, $p<.05$）。

考　察

本研究は，内集団・外集団が存在し，さらにその両者を包括的に含む上位集団が存在するような，階層的な集団間関係において，集団の顕現性が集団間バイアスに与える影響を検討することを目的としていた。その中でも特に，共通内集団アイデンティティモデルに従い，上位集団の顕現性が集団間バイアスに及ぼす影響の検討を行った。本研究で提示した仮説は以下の３つである。

仮説１．原集団間の顕現性が高まると，集団間バイアスが高くなるだろう。

仮説２．上位集団の顕現性が高まると，原集団間のバイアスは低くなるだろう。

仮説３．上位集団顕現性が低いとき，原集団の顕現性と集団間バイアスには正の関連が見られるが，上位集団顕現性が高い時には，原集団の顕現性と集団間バイアスには関連が見られないだろう。

以下，上位集団の顕現性，原集団の顕現性が集団間バイアスに及ぼした影響に関して，それぞれ検討を行う。

上位集団顕現性と集団間バイアスとの関連

本研究の結果では，上位集団の顕現性と集団間バイアスとの関連は，主効果，交互作用ともに見られなかった。したがって，上位集団の顕現性が高まることが集団間バイアスを低減するという仮説２は支持されなかった。また，上位集団の顕現性が低いときよりも高いときにおいて，原集団の顕現性と集団間バイアスの関連が低いという仮説３も支持されなかった。したがって，本研究においては，上位集団の顕現性が集団間バイアスを低減する効果は，直接的にせよ間接的にせよ，見られなかったといえる。なぜこのような結果が見られたのだろうか。

この理由を明らかにするために，本研究と先行研究の方法の違いから検討を行いたい。Gaertnerとその同僚らによって行われた実験・調査では，外集団が「一つの集団」として知覚される程度が測定され，外集団が上位集団として「一つの同じ集団である」と捉えられることにより，集団間バイアスが低減するという効果が確認されている（Gaertner et al., 1989, 1997）。この現象の説明として提唱された共通内集団アイデンティティモデルによると，内集団と外集団という「二つの集団」から両者を共通に包含する共通の上位集団という「一つの集団」として認知されることが集団間バイアスを解消すると述べている（Gaertner et al., 2000）。本研究ではこの理論的予測に基づき，上位集団の顕現化を行い集団間バイアスを低減する効果を検討したが，そのような効果は見られなかった。

以上のことから可能性として次のことが考えられる。従来の研究でいわれてきたような共通の上位集団の存在それ自体は集団間バイアスを低減しない。だが，このことは共通内集団アイデンティティモデルが理論的に間違っていることを意味するわけではないだろう。上位集団が集団間バイアスを低減するのは，上位集団があることによって，それまでの外集団が「上位集団次元での内集団」へと変容するためであるという可能性が考えられる。そのため，本研究が行ってきた操作では，確かに上位集団が顕現化はしたものの，外集団が「共通上位集団における内集団」として認知的に再体制化されるには至らなかったために，集団間バイアス低減の効果が見られないという結果が得られたのかもしれない。この点に関しては，外集団成員が共通上位集団における内集団として捉えなおされた程度が上位集団顕現化と集団間バイアスの程度を媒介しているか否かを検討することでこの仮説を検討できると考えられる。したがって，従来の研究と同様に，本研究でも外集団が「一つの同じ集団である」と捉えられる程度を測定する必要があったといえよう。これは今後の課題である。

本研究の結果は，集団間バイアスを低減させるには単純に共通の上位集団を目立たせるだけでは不十分であることを明らかにした。このことは民族紛争，人種差別などの社会的な集団間葛藤において，「地球市民」「アメリカ人」「南アフリカ人」などの共通の上位集団を目立たせたり，強調したりするだけでは，集団間葛藤は低減できないことを示唆している。お互いの集団が一丸となり，集団間葛藤を解消していくためにはいかなる要因が必要となるのか。本研究では，外集団の上位内集団としての認知的再体制化が必要となる可能性を指摘したが，今後更なる理論的・実証的な蓄積が俟たれる。

原集団顕現性と集団間バイアスの関係

本研究の結果は，原集団の顕現性が高まることで集団間バイアスが高まることを明らかにした。これは先行研究と同様のものであった。さらに，内集団に対する好ましさと外集団に対する好ましさに対してそれぞれ分析を行い，より詳細な検討を行ったところ，原集団顕現性が低いときよりも高いときに，外集団に対する好ましさが低くなっていた。その一方で，内集団に対する好ましさに関して有意な差は見られていない。したがって，本研

究で見られた，原集団顕現性が集団間バイアスを高めるという効果は，外集団に対する好ましさが下がったことによって生じたものであり，内集団に対する好ましさが上がったことによって生じたものではないことが分かる。集団間バイアスは主として内集団をひいきすることによって生じることが指摘されており（Brewer, 1979），本研究で得られた結果は従来の知見とは異なっている。

この解釈は非常に困難であるが，可能性の一つとして次のことが考えられる。原集団の顕現性操作のための話し合いのために，内集団である文系学部・理系学部に関して話し合いをしてもらった。その中で自分の学部の評価を下げるような，すなわち内集団卑下的な発言が数多く見られた。このことが顕現性の操作のために，内集団に対する好ましさが上がらなかった可能性として考えられる。話し合いの内容自体をデータとして蓄積していないため，直接的な検討はできないが，内集団卑下と集団間バイアスの関係に関してはまた別の観点からの議論が求められるといえよう。

その一方で，原集団の顕現性が高いときに外集団の好ましさが低いという効果が見られたことは，本研究における集団の顕現化の操作が外集団を実体化させたためである可能性が考えられる。実体性のある集団は否定的に見なされることが指摘されており（Abelson, Dasgupta, Park & Banaji, 1998；Wildschut, Insko, & Pinter, 2004），本研究においても同様に外集団の実体化が好ましさを下げたのではないだろうか。ただし，外集団の実体性と外集団に対するネガティブ知覚の関係のみならず，外集団拒否に関しては内集団選好と比較してまだ十分な実証的な蓄積があるとは言えない。外集団拒否は単なる内集団選好の裏返しとはまた別のメカニズムがあることが示唆されており，外集団拒否の生起メカニズムを明らかにしていく必要があるだろう。

集団間バイアスの発生と原集団顕現性に関して

本研究では，原集団顕現性低条件においては，従来頑健に見られてきた集団間バイアスが見られず，集団が顕現化したときのみ，有意な集団間バイアスが見られた。この理由として，従属変数の測定方法の問題が考えられる。本研究では，従属変数の測定のために内集団成員と外集団成員が撮ってきた写真の撮影者に対する好ましさを尋ねている。すなわち，刺激の選定の際に極力排除したものの，写真それ自体の影響と原集団顕現性の影響が交絡しているために，原集団顕現性の効果が希薄化した可能性が考えられる。この点に関しては，より直接的な指標を用いるなどの工夫を行い，今後更なる検討が必要になるだろう。

引用文献

Abelson, R. P., Dasgupta, N., Park, J. & Banaji, M. R. (1998). Perceptions of the collective other. *Personality and Social Psychology Review*, **2**, 243-250.

Abrams, D. (1985). Focus of attention in minimal intergroup discrimination. *British Journal of Social Psychology,* **24**, 65-74.

Brewer, M. B. (1979). Ingroup bias in the minimal intergroup situations: A cognitive motivational analysis. *Psychological Bulletin*, **86**, 307-324.

Doise, W., Deschamps, J. C., & Meyer, G. (1978). The accentuation of intra-category similarities. *In Tajfel*, H. (Ed.), *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. London: Academic Press.

Doosje, B., Ellemers, N., & Spears, R. (1995). Perceived intragroup variability as a function of group status and identification. *Journal of Experimental Social Psychology*, **31**, 410-436.

Gaertner, S. L., & Dovidio, J. F. (2000). *Reducing Intergroup Bias: The Common Ingroup Identity Model.* Philadelphia, PA : Psychology Press.

Gaertner, S. L., Dovidio, J. F., & Bachman, B. A. (1996). Revisiting the contact hypothesis : The induction of a common ingroup identity. International Journal of Intercultural Relations, **20**, 271-290.

Gaertner, S. L., Mann, J., Murrell, A., & Dovidio, J. F., (1989). Reducing intergroup bias : The benefits of recategorization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 239-249.

Gonzâlez, R. & Brown, R. (2003). Generalization of positive attitude as a function of subgroup and superordinate group identifications in intergroup contact. *European Journal of Social Psychology*, **33**, 195-214.

Gonzâlez, R. & Brown, R. (2006). Dual identities in intergroup contact: group status and size moderate the generalization of positive attitude change. *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 753-767

Hensley, V. and Duval, S., (1976). Some perceptual determinants of perceived similarity, liking, and correctness. *Journal of Personality and Social Psychology* **34**, pp.159-168.

Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Sage.

Maddox, K. B., & Gray, S. A. (2004). Manipulating subcategory salience: Exploring the link between skin

tone and social perception of Blacks. *European Journal of Social Psychology*, **34**, 533-546.

Pettigrew, T.F. (1998). Intergroup contact theory. *Annual Review of. Psychology*, **49**, 65-85.

Tajfel, H. (1982). Social psychology of intergroup relations. *Annual Review of Psychology*, **33**, 1-39.

Tajfel, H., Billig, M., Bundy, R., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.

Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In Worchel, S. & Austin, W. G. (Eds), *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, Brooks/Cole.

Tajfel, H., & Wilkes, A.L. (1963). Classification and quantitative judgment. *British Journal of Psychology*, **54,** 101-114.

Wildschut, T., Insko, C.A. and Pinter, B. (2004). The perception of outgroup threat: content and activation of the outgroup schema. In, Yzerbyt, V., Judd, C. M. and Corneille, O. (Eds.) *The Psychology of Group Perception.*, Psychology Press, 335-361.